

いまなぜ「日本「文」学史」が必要なのか。「文学」と「文」の違いはどこにあるのか。「文学」の概念と枠組みを超えて「日本「文」学史」の構築を試みる本書の狙いとアプローチの方法を掲げる。

◆第一章…「文」の概念を通して日本「文」学史をひらく

Wiebke DENECKE

はじめに——なぜ日本「文」学史を提案するのか

日本人はいつ最初の「日本文学史」を書いたのだろうか。「日本文学史」というタイトルをもつ書物は、十九世紀末に入って初めて著されるようになった。が日本人は少なくとも奈良時代の八世紀から自らの文学の展開と歴史についての認識を持っていた。ただし、そのころの日本には、「literature」というヨーロッパ言語の訳語である「文学」ということばと概念はまだ存在していなかった。しかし、日本最古の詩文集である『懷風藻』（七五一年）の序文は、漢詩の発展を語るにあたり、日本の文学史を、宇宙を発端とする「人文」をはじめとし、「文」明の発展、「文」字の起り、朝鮮半島との外交の際に使われていた「文」献、周朝の創立者であった「文」王をモデルとした儒教の教育から、七

世紀の天智天皇の朝廷で行われた詩宴、および新しく創立された「大学寮」までにわたり述べている。つまり『懷風藻』の序文においては、「文」ということばが決定的かつ重要な概念を示しているのである。したがって『懷風藻』の序文は、漢詩の文体に関する歴史に限って記されているとはいえず、日本の「文学史」を記した最初のものといつてよいであろう。

日本において『懷風藻』の次に「文学史」を記述したテキストは、『古今和歌集』（九〇五年）のいわゆる仮名序と真名序（漢字で書かれた序）である。ここでは、『懷風藻』の序文とは異なり「文」の概念というよりも「道」、つまり「歌の道」を説き、和歌の文体について和歌が人間と世界の万物の「歌」をうたいたす本能に基づくものであり、それが神の時代まで遡ると述べている。万葉時代の柿本人麻呂を誉め称え、八世紀および九世紀の「六歌仙」の歌を論評し、歌が浅薄な愛情を表現する手段になってしまったことを嘆き、将来の「歌の道」の復活への展望を語っている。『古今和歌集』の序文が『万葉集』を自身の先駆者として指摘したことは、後に十五世紀に至るまで二十一代の「勅撰和歌集」の伝統を作り出しただけではなく、その序文を通して勅撰集の間の連続性を強調することで、文学史のモデルをも創立したのである。

ところが今日の我々は、最初の「文学史」はと問われれば、『懷風藻』や『古今和歌集』を思い出すことはなく、おそらく田口卯吉（一八五五～一九〇五）という歴史学者兼経済学者が著した『日本開化小史』（二八七七～八二）、もしくは三上参次と高津鋏三郎の著作で、「文学」という新しい概念を直接タイトルに取り入れた『日本文学史』（二八九〇）を挙げることだろう。⁽¹⁾ 田口は古代から明治時代

までの日本の文明の発展を考察し、日本人は独自の特徴を備えた、「文学」も含めた「文明」をもつ「国民」であると証明する。日本は人類の進歩とともに発展してきた国であるというビジョンは、フランスの政治家フランソワ・ギゾー（François Guizot）が執筆した『ローマ帝国滅亡からフランス革命までのヨーロッパ文明史』（*Histoire générale de la civilisation en Europe depuis la chute de l'empire romain jusqu'à la Révolution française* (1838) 日本語版は安土正夫訳、みすず書房、二〇〇六年新装版）に代表されるヨーロッパ各国の文明史に関する著書などからインスピレーションを受けたものかもしれない。ギゾーはその著書においてフランスの哲学と文学がヨーロッパ全土に影響を与えた点を強調しながら、文学、芸術、宗教等に文明の発展における役割を認めた。⁽²⁾ これに対して田口の日本における文明の発展に関する叙述は、文学に最も造形的な役割を与えている。田口にとって文学は人間の根源となる力であり、人間の心を表しつつ、人間の心のある方向へ導く力である。その点を明らかにする為に、田口はヘンリー・トーマス・バッケルが『イギリスにおける文明史（*History of Civilization in England*）』（一八五七～六二）において「文学は…人心を化する力なし」（「Literature... has no power to change the human heart」）と述べた意見を激しく批判し、『古今和歌集』の仮名序を引いて「和歌は目に見えぬ鬼神を泣かしめ、男女の中を和らげ、猛き武士の心を慰む」と説いている。⁽³⁾ バッケルは『イギリスにおける文明史』において明確に文学を軽蔑し、「文学そのものは軽薄なものでしかない」（「Literature, in itself, is but a trifling matter」）と主張した。一方、田口は、「文学」そのものが社会および歴史において特にそれらを発達させる重要な役割を果たしたことを、『古今集』の仮名序の概念および言葉を使って読者に伝えていく。「文学とは人の

心の顕像なり。おおよそ人の心の世に顕るものその種まことに多し（以下略）と宣言している^⑤。田口はヨーロッパから入ってきた「国家」、「文明」、「国文学」、「社会と思想の進歩」といった訳語や新しい概念を用い、新たな日本文明と文学の通史を語っているにもかかわらず、つまるところ「文」こそが文明のすべての基礎であるという『懐風藻』が説いた詩論と、和歌は人間の本能であり、人間性に属する決定的なものであるという『古今集』の序が示した和歌論の枠組みに依拠もしている。田口は、日本の文明における文学史を記述しながら、伝統的な詩歌論を「文学」という新しい訳語の概念を説明するために用い、日本および東アジアと欧米との文明と文学の間の関係の相違点をも強調しているのである。

とはいえもちろん、田口の著書は、文学史と謳ったものではない。よって、「本当の」最初の日本文学史とは問われれば、田口の『日本開化小史』から十年後の一八九〇年に出版された三上参次、高津敏三郎共著の『日本文学史』である、ということになるかもしれない。確かに当該書は一二〇年後に生きる我々にとっても、「文学史」として承認しやすい。それは、三上と高津の『日本文学史』の書き方と枠組みが現代の二十一世紀における日本文学史を語る大方の書物と大同小異であるからである。その枠組みとは、十九世紀のヨーロッパで書かれた文学史を基としている。そのビジョンは大体以下の通りである。ある民族の文学を「国文学」として定義し、「国文学」はその民族の精神の表現であると解釈する。「文学史」を時代、文体、作者、著作別に分類し、進歩的な過程の上にあると把握する。したがって、文学の中心になるものとして（狭義において）日本の「国文学」とはいえない漢

詩文を無視し、「漢風」の文学よりむしろ「国文学的な」和文のテキストを積極的に採り上げている。前近代において高い位置にあった漢詩文を避け、主に和文的なものがカノンとして定まったのは、明治時代のことであって、その最初の「本当の」文学史の作者が光を当てている著作は、我々が今日も日本古典文学のカノン（代表作）に属する大作として見なすものである^⑥。例を挙げると、『懐風藻』や嵯峨朝の勅撰漢詩集ではなく『万葉集』や『古今和歌集』、漢詩や国史ではなく和歌、物語（特に『源氏物語』）、漢文日記ではなく仮名日記。そして藤原明衡や大江匡房が著した、平安時代の貴族文化以外の一般民衆の文化も伝える『新猿蓑記』『遊女記』『傀儡子記』等の記録ではなく『枕草子』のような随筆。また、三上、高津両氏による『日本文学史』は、和文カノンを「国文学」として定着させるのに貢献しただけではない。同書で提案されている文学の定義は、その提案者の名前を明示して挙げてはいないものの、ヨーロッパの文学論の常套的な概念と語句を連ねている。つまり、文学のテキストはある文体を用いて巧みに、洗練された技法をもつて書かれたものであり（古代ギリシャ語の *poiesis* に遡る英語の「poetry」という語は「作り物」という意味に根ざすが、『古今和歌集』の仮名序にある「歌は自然の本能である」というのと対照的である）、その上で、文学が人々に何かを教える、つまり、学ぶ機会を与えることで、人々の喜びとなる（古代ローマの詩人ホラティウスの「*prodesse et delectare*」と共鳴する）ものである^⑦。

今日、我々は「文学」という概念が、たかだか一〇〇年使われてきただけの外来語の訳語であることをほぼ忘れ去ってしまったている。「文学」ということは「文」より分かりやすく、身近に感じら

れることは疑いがないであろう。例えばどこかの書店で「文学」に関する本を探していると言え、店員は現代の散文小説、エンターテインメントのためのフィクションの著作、あるいは古典文学作品が並んでいる書架に案内するだろう。それに対して、「文」の本を探していると言ったら、店員は、「文章の書き方」、論文、手紙文、履歴書に添付する自己紹介文などの「文」文章と関連する本を探し出してくるだろう。

以上これまで挙げてきた四つの「文学史」の中で我々二十一世紀人がもつビジョンにより近いテクストは間違いなく三上、高津両氏による『日本文学史』であり、『日本文学史』以前の三つのテクストは「本物」の文学史ではないと判断する人は圧倒的に多いかもしれない。これは当然のことで、明治時代以降の一〇〇年あまりの間に書かれた日本文学史の著作を見渡してみれば、どれほど多種多様であったとしても、その著作のほとんどが主に明治時代に定着した、今日は当たり前となってしまう近代の意味での「文学史」の枠組みの中で動いているからである。

それでは、この「国文学」、そして近代の訳語である「文学」の概念を使って日本文学の通史を書くことになぜ本書は疑問を呈するのだろうか。さらには、なぜ明治時代に定着した「国文学」の概念のもとに執筆された日本文学史の著書の枠組みを超えようとしているのであろうか。まず、明治時代以前の「文」の概念は非常に幅広く、文様、文飾、文字、漢詩文のテキスト、学問、倫理教育、文明、文化等の多岐にわたる意味をすべて含んでいた。「文」と比べて今日の「文学」は一方では広すぎ、しかし他方では狭すぎるという、両方向に不正確な意味を持つ概念であるといつてよいからである。

つまり、明治時代以降の「文学」とは、前近代の「文」のように主に漢詩文や漢学等を指すのではなく、前近代に高尚な「文」学とは認められていなかった物語文学、女流日記、能、浄瑠璃、歌舞伎等の仮名文学や和漢混淆の文学をも含み、その意味において「文」より広い意味を持っていた。が、他方では、前近代の「文」のような学問、倫理教育、文明、文化などの意味をほぼ失ってしまったため、そして、前近代に最も重要視された詩歌の文体よりも近代になって突然重要視されるようになった小説の文体を中心に据えたため、「文学」の意味と意義は「文」よりも狭められることになった。結論として明治時代に学校制度の中で国文学という学科の創立とともに著された日本文学史の著作は「日本文学」と呼ばれる伝統を新しく作り出し、ある意味で偽造も行いながら、日本における「文」という本物の文学的な伝統を同時に縮小させてしまったのである。

さらに本書が明治時代に定着してきた日本文学史の枠組みを超えようと試みるもう一つの理由は、世界の文学史において、日本文学の伝統が持つ非常に興味深い特徴と思われるものを、この従来の日本文学史が覆い隠してしまっているからである。その特徴とは、日本の文学伝統の「バイリテラシー(biliteracy)」性である。アルファベット言語によるバイリンガルの文学伝統は、世界の各所にそしておよそどんな時代にも稀には存在した現象である。例えばヨーロッパでは、中世から十八世紀頃まで、共通言語(lingua franca)であったラテン語で執筆した文学伝統とともに、各国の国語、つまりフランス語、ドイツ語、イタリア語等で書かれた文学伝統の流れがあった。ラテン語は、日本における漢文と同じように、より正式で公式的、学問的、そして書記的な言語であり、その地位は各国の国語より

高かった。しかし、東アジアの言語は表意文字である漢字を採用したため、日本はバイリンガルの文学伝統というよりもバイリテラート (bilingual) の文学伝統を有している⁽⁸⁾。さらに中世のヨーロッパの知識人が自身の国語以外にラテン語も話せた(発話能力があった)のとは対照的に、前近代の日本の知識人の大半は漢文を書くことはできたが、中国へ渡航したことがある人々を除いて中国語を話すことはできなかった(発話能力がなかった)。訓読という、中国からもたらされたテキストを「読む」方法を開発し、それに従って発音し解釈した。漢文を読み書きする能力は求められても、話すことは必ずしも必要ではない。日本人は「バイリテラート」であったのである。つまり二つの書記言語を有してはいたが、たいていは「モノリンガル」、すなわち一つの言語だけを話した。東アジアの所謂「漢字文化圏」は、この点で世界文学史の立場からみて特異である。更に、日本は、中国からある時期において直接的な支配を受けた朝鮮半島やベトナムとは違い、島国として中国から最も離れ、古代から国語の和文で記録した文学伝統を形作ってきた。韓国とベトナムの場合、近世以前の国語で記録した作品は少なく、そうした作品があまり残っていないのに対して、最初から強い和文伝統をも持つことになった日本のバイリテラシーは、非常にユニークな現象であると言つてよい。にもかかわらず、明治時代に定着した「国文学」の文学史の枠組みは、日本の漢文の伝統を和文の物語、仮名日記等と比べて低く評価し、日本文学の伝統たるバイリテラシーのユニークさを充分に意識しておらず、ゆえに残念ながら研究が行われるべきところにスポットライトがあまり当てられていないのである。

それでは明治時代に定着した「国文学」の文学史の枠組みを超えようとする必要性があるとすれば、それを目標として我々はどう進めばよいのであろうか。本書においては新たに、日本「文学」史を超えて日本「文」学史をひらきたいと考えている。もう少し言葉を補うならば、六世紀から十九世紀までは日本文化史の中心的な柱であったにも関わらず、今ではほかの世界から入り込んだ異物のようにみえる、伝統的な「文」という概念を通して日本「文」学史を語り直したい。現代以前の日本における「文」の人的、社会的、国家的、儀礼的、社交的、言語芸術的、そして文化的意味と意義を再考したい。「文」は政治的かつ社会的な現実をどのように形成し、影響を与えていたのか。人々および社会や国家にとって「文」とはどのような意味を持っていたのか。「文」はどのようにして十四世紀もの間にわたって日本の文化史上、力強くかつ魅力的な変化にあふれた概念となったのか。どのような人が「文」の世界に属し、どのような人が「文」以外の世界に生きていたのか。明治時代以前の言語世界、文化のロジック、教育制度、社会とジェンダーのダイナミズム、芸術の価値観と空間、文体のヒエラルキーおよび文体の作用について知ること、古代と中世の人々がなぜ、どのような場面で文を作ったのか、どのような教育を受けた上で、どのような文を作ったのか、そして最後に自身の作品に対してどのような意識を抱いていたのかという点について検討したい。これらは本書がこれから取り上げていく基本的な問いである。

本章は、その「文」学史をひらくための枠組みとツールを紹介する入門的な章である。「文」と「文学」の概念の間のギャップを理解し、なぜそれが重要であるかという問いを掲げ、説いていく。まず、「文」と「文学」が、ただ言葉が違っただけではない、ということを考えるために、二十世紀の

所謂「言語論的転回」という画期的思想に基づく、「言語」を重視する世界観と問題意識を確認する。そして、二十世紀後半のドイツにおける人文科学全般へ影響を与えた「概念史」(Begriffsgeschichte)という研究パラダイム、すなわちドイツ語の政治的、哲学的、科学的かつ芸術的な語彙と概念の発展と変容の考察を行ったパラダイムに触れる。本書はあくまでも「文」の概念の歴史的な展開を通して、「文」学史をひらくことを目指すものである。そのために特にそれを導く道しるべとなるドイツの概念史の研究パラダイムを紹介したい。そしてこの「概念史」の研究方法を念頭に置きながら、最後に本書の主題に及ぶことになる。つまり「文」の概念の歴史的な展開の考察を通して、具体的にどのような明治時代に定着した日本文学史の枠組みを超えて、日本「文」学史をひらけばよいか、という問題について論述したい。

一 「ことば」と「概念」はなぜ重要なのか？

—二十世紀の「言語論的転回」

二十世紀は、言語そのものと世界との関係に対する意識が過剰なほど高まったといえる。言うまでもなくヨーロッパにおける文化史は様々で、多層にわたるものであるが、ギリシャ哲学を代表するプラトンやアリストテレスにまで遡る、感覚器官でわかること以外を求めようとする「形而上学」といわれる伝統が特に広く行き渡っていた。簡単に言えば、「形而上学」の「實在論」(metaphysical realism)

という思想は、人間言語と感覚経験を越えたところに世界そのものが自立的に存在すると説いている。例えば、「食卓」そのものは誰かにその存在を認識されているかどうかは別にして自立的に存在しているものであり、「食卓」ということは、実態世界を映し出すものとして定義されていた。ところが二十世紀に至って、その実態の世界に対する信頼が根底から揺らぎはじめた。人々は「現実」がいつ何時も「言語」を通して成立するものであり、現実を分析するものであれば、言語とその修辞の特徴を考慮に入れてはいけないということに気づいたのである。それまで紛れもない真実と信じられていた事柄が粉々となり、形而上学への信用性が薄くなる一方で、言語そのものが前代未聞の権力を持つこととなった。スイスの言語学者であるフェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)は『一般言語学講義』(Cours de linguistique générale, 1916)の中で、言語は言語以外の意味や現実に関する言及により定義されるシステムではなく、「相違」によって定義されるべきものであると提案した。つまり、食卓がどんなものであるか、実態の世界に存在するものとして把握するのではなく、食卓は椅子ではない、書架でもない、ベッドでもないゆえに「食卓」であることがわかってくるということである。同様に哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインは現実への言及よりもコンテクストの大切さを強調した。『哲学探究』の中で彼は「単語の意味は言語の利用の中にある」と唱え、食卓というものの意味が何であるかを考える時、人々の食卓の使い方、人々が食卓と関連してどのようなことを言う可能性があるかを考慮した。つまり、ヴィトゲンシュタインの概念によれば、人々がどんなタイプの「言語ゲーム」(“Sprachspiele”)をするかということから、ある言葉の意味が理解できる。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾ ヴィ

トゲンシュタインにとっては、「言語ゲーム」というのは、広い意味での世界観に近い現象であった。

二十世紀の言語学と哲学を経由して、言語は現実を消極的に反映するものではなく、現実を活動的に形成している基本的な要素であるという発見は、ほかの分野へも浸透していった。アメリカの歴史学者ヘイドン・ホワイト (Hayden White) は一九七八年に発表した著書 *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* の中で、歴史の分野においても同じように言語論的転回を行った。客観的な事実が居並ぶ分野であるという歴史学に対する常識的な考え方を批判し、詩歌や小説に見られる修辭的転義法によって歴史の叙述も形成されていることを強調した。言い換えれば、紛れもない真実が存在するわけではなく、作者の目標と世界観によって支配された歴史を述べるための多様な歴史叙述があるだけである。さらに言語論的転回はテクストや言語を使用しない分野にまでも及んだ。文化人類学者クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) は「文化」そのものを言語的な記号制度を用いて分析したほうがよいと唱えた。ある文化的な現象を理解するにあたり、その現象およびそれを取り巻くコンテクスト、世界観に何か意味があるように考察しなければならないということを説き、ギアツはそれを「厚い記述」(“thick description”) と名付けた。^① このギアツが提示した言葉と文化に対する考え方は、欧米の文化論の分野では現在も盛んである。

言語は現実を形容するというよりも、現実を形成する構成要素であるというのが我々の時代の支配的なパラダイムになったといつてよいだろう。人間の認識および知識の決定的要因である言語の出現は、人文・社会科学の分野に大きな影響を及ぼし、今では常識の域に到達しつつある。アメリカの哲学者であるリチャード・ローティ (Richard Rorty) の論文集の題目に由来する「言語論的転回」(“linguistic turn”) と名付けられたこの変化は、我々の世界観に抜本的变化をもたらした二十世紀の新しい思想の枠組みである。

二 二十世紀の「概念史」(“Begriffsgeschichte”) という研究方法

言語論的転回は、現代語と世界との間の関係を理解しようとする試みから発展してきたが、つまるところ歴史に向かう転回も意味していた。つまり、言語が現実を形容するだけではなく、現実を構成するものでもあるならば、我々が使っている言葉がどこから来たのか、いつ創造されたのか、その意味が歴史においてどのように変容していったのかという問いを発することとなり、言語論的転回は我々の言語に対する自意識を高めたというわけである。二十世紀の言語論的転回と「概念史」という研究方法の流行には密接な繋がりがある。我々の社会や自分自身のイメージを標榜するのに用いる中心的概念——「民主主義」「危機」「国家」等の概念はいくつか現在使われているような意味を持つようになったのか。戦後、ドイツにおいて「概念史」を研究する運動の先鋒となったラインハルト・コゼレック (Reinhard Koselleck) は、概念史を過去の意味を発掘するツールとして利用すると同時に、もう一方では我々が今生きている言語的な「現代」の時期を定めることも試みた。コゼレックは翻訳や説明を必要としない、日常的な現代語として理解できる言語が形成される時期を(近世と現代を「山」に

たとえば、その間という意味において「鞍部時代」(“Sattelzeit”)と呼んだ。そして、ドイツおよびヨーロッパの場合、我々の今の世界観、言葉遣い、言語意識が形成された時期は、一七五〇年から一八五〇年の間であつたと提案した。言い換えれば、「鞍部時代」というのは、近代以前の過去と現代の間の架け橋である。

例えば「語源学」(etymology)という単語の由来および歴史的な変化を探る学問は、東西を問わず、古代まで遡るのに対し、「概念史」は、現代の学術運動であり、研究方法である。⁽¹²⁾ その研究方法は、十九世紀末に端を発し、特に戦後ドイツで隆盛を極めたものである。⁽¹³⁾ ノーベル賞受賞者であるルドルフ・オイケン(Rudolf Eucken)が一八七九年に発表した『哲学専門用語史』(Geschichte der philosophischen Terminologie)は、古代ギリシャ・ローマの時代から現代ドイツまでの哲学分野の専門用語の軌跡を辿る最初の試みであり、その序文からは真に「概念史」の立場から哲学史を執筆する研究が文字通り「哲学的な」主題であり、その幅広さと困難を熟知していたことが明らかである。ルドルフ・アイスラー(Rudolf Eisler)の『哲学概念辞典』(Wörterbuch der philosophischen Begriffe、初版一八九九年、一九三〇年までに数回の改訂と再版)と比較してみると、アイスラーが序文でこの辞典は哲学史の複雑性に立ち向かうための参考書でしかないと言明しているのとおり、アイスラーの概念史は学術的な課題および方法というよりも学生のための手引きみたいなものであった。

一九六〇年から一九九〇年代の間に「概念史」の研究方法はドイツの大学内において人文科学と社会科学のすべての領域に充満し、ドイツの学者たちは巨大な「概念史」の辞典プロジェクトに取り組むようになった。アイスラーの辞典を大きく修正増補した十三冊にも及ぶ『哲学の歴史的辞典』(Historisches Wörterbuch der Philosophie)が、一九七一年から二〇〇七年の間に出版されたが、この辞典は傑出した哲学者であるヨアヒム・リッター(Joachim Ritter)の編集指導の下、一五〇〇人以上の学者が合作した大作である。オットー・ブルナー(Otto Bruner)、ウェルナー・コンゼ(Werner Conze)、ラインハート・コゼレック(Reinhard Koselleck)ら歴史学者は、一九七二年から一九九七年の間に八冊から成る『歴史の基礎的概念——ドイツにおける政治的・社会的言葉遣いの歴史的な辞典』(Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland)を編集し、九〇〇〇頁以上の紙幅を費やし、一七〇〇年代から現代までのドイツにおける主に政治、生活および社会空間における中心的な概念について検討している。そして近年に至り、概念史に刺激された巨大辞典プロジェクトとして二〇〇〇年から二〇〇五年の間に出版されたのが『芸術・美学の基礎的概念』全七冊(Ästhetische Grundbegriffe)である。

このように膨大な国費をつぎ込んだ「概念史」に関する長期プロジェクトがここ最近二世代にわたるドイツの学者に一生分の仕事を与え生計を支えたことは間違いない。ゆえに、戦後ドイツにおける概念史研究の実態というのは、一方で研究方法であつたと同時に、もう一方では「研究制度」であつたといつてよいだろう。自分自身も様々な辞典に論文を出すことで貢献したドイツ出身の、スタンフォード大学教授ハンス・ウルリヒ・グンブレヒト(Hans Ulrich Gumbrecht)は、その「概念史運動」の多巻重冊の産物を、ユーモアを交えて「精神の巨大なるピラミッド」と名付けた。⁽¹⁴⁾

さて、「概念史」の動きは、そこに一つの決められた法則が存在するかのよう「方法」と呼ばれたが、実は学者が用いた方法は多様多彩であった。アイスラーのように、ある言葉の由来と変容の軌跡を辿りながら、「概念史」が特定の分野の術語を明らかにするツールであるとし、概念史を用いて文献学研究を進めた学者もいたが、「概念史」を手応えのある哲学的な問題の形として受け入れて、概念史を通して言語論的転回に貢献しようとした学者もいた。グンブレヒトはこの点について「現実への指示」という問題に対する両義性¹⁵（“Unentschiedenheit im Hinblick auf das Problem der Weltreferenz”）を指摘し、ドイツにおける「概念史」の方法の長短所を明らかにした。つまり、この方法を用いた主要な学者のほとんどが、言葉からは独立した絶対の現実が存在することを（哲学の術語で言えば「現実への指示（reference to the real world）を有すること」）信じる一方で、我々の現実の意識は言語に強く影響されていると確信していたといつてよい。これに対して、同時代のフランスにおける最も急進的な「社会構造主義」（social constructivism）の提案者であった社会学者ブルノ・ラトゥール（Bruno Latour）は一九七九年に発表した『試験所の生活』（Laboratory Life, Steve Woolgar 共編）の中で、最も「客観的」とみなされる自然科学研究でさえも、宇宙に存在する自然の法則というよりも、人間社会における慣習や交流に支配された分野であると堂々と主張した。社会構造主義は「現実への指示」に関する問題に否定的であり、さらに現実そのものが人間の習慣と関連することによってのみ「構成」されると信じている。ところが、ドイツの「概念史」運動は現実への指示の問題に対して「両義的」であった、つまり、どっちつかずの態度をとったため、最も否定的に傾いた場合、概念史はある分野の専門用語の研究を進めるにとどまり、最も肯定的に傾いた場合はどんな分野に対してもそれを変質させてしまうほどの影響力を与え、万物の研究方法となり得た。戦後ドイツにおいて最も傑出した哲学者であったハンス・ゲオルク・ガダマー（Hans Georg Gadamer）は一九六〇年に発表した名著『真理と方法——哲学的解釈学の要綱』（Wahrheit und Methode）で概念史について、それが万物に適した研究方法であるとして以下のように述べている。

現代における哲学の仕事が哲学の古典的伝統と異なる点は、伝統を直接に断絶なく引き継いでいないところにある。（中略）これは、わけても概念に対する関係の変化に明確に現れている。西欧の哲学的思考が形成されてくるうちには、ギリシア哲学の概念をラテン化し、さらにラテン語による概念を近代語の形にとりいれるといった変化をたどってきた。これによって、じつに深甚な影響がもたらされ、また根底にまで触れる変化が起きたものの、過去数世紀における歴史意識の成立は、そこにさらにいっそう深い切れ目が生じたことを意味している。それ以来西欧的思考の伝統の連続性は、屈折した形でしか動いていないのである。というのは、かつて伝統の諸概念を自分自身の思考のために役立てていたあの素朴な無邪気が失われたからである。（中略）新たな批判的意識が、それ以来すべての責任ある哲学することにもなっていないければならず、またこの批判的意識は個々人が自分の共同世界との対話を行ううちに形成されてくる言語慣習と思考慣習とを、われわれすべてが共に所属している歴史的伝統というフォーラムの前におくのである。以

下の論究は、このような要求に応えるために、概念史的問題提起と主題の事柄に即した展開とをできる限り緊密に結びつけることに努めている。⁽¹⁶⁾

ガダマーのヴィジョンに基づけば、概念史は世界および人間としての我々個人を把握し解釈する鍵となった。このようにして概念史は人文科学および社会科学の各分野の総括的な基礎および方法としてなくてはならないものとなり、非常に普遍的な方法となり得たのである。

三 将来へ向けて——「メタフォロギー」の隠喩論

ガダマーの概念史に対する莊重なヴィジョンは五十年以上も前のものであるが、二十一世紀に向けて「概念史」という方法はどのような展望を見据えているのだろうか。「概念史運動」が終焉を迎えつつあるなか、「概念史」研究の方法の影響の下に作成されたおびただしい量の、内容も多岐にわたる辞書が築き上げた、グレンブレヒトが言うところの「精神の巨大なるピラミッド」のイメージは、歴史的価値のある不滅の側面を照らし出しながらも、過去のエジプトの埋葬の産物のようなものになってしまうのだろうか。それでも、グレンブレヒトは『哲学の歴史的辞典』から意識的に排除された概念史の一筋が、将来大きく花開く可能性があると唱えた。その可能性とは一九六〇年代以降ハンス・ブルーメンベルク (Hans Blumenberg) が、先鋒となつて展開した「メタフォロギー」[Metaphorologie]、

すなわち「隠喩論」である。⁽¹⁷⁾ アリストテレスにまで遡る修辭学において定義される、メタファー（隠喩）とは、修辭技法の一つであり、ある言葉を具体的な一見関連性がないように見えるイメージで置き換える表現である。隠喩は文字通りに解釈すると正しくないが、通常のロジックを超えて、何か意味が深く、言葉では簡単に伝えることのできない真理を表現することができると言える。例えば、「人生は夢だ」と言つたとしよう。我々は我々自身の生活が「寝る」、「夢を見る」、「目覚める」といった時間から成り立っていることを知っているため、この文章は文字通りに解釈すれば間違っている。しかし、人の一生は無常であり、空虚であり、空蟬のようなものであるという難しい真理や知恵を表現するために隠喩の力を借りているのである。西欧の修辭学の伝統は修辭技法を文飾としか見なさないが、ブルーメンベルクは飾りとしてのメタファーではなく、むしろ文字通りの意味や日常のロジックでは表現できない基礎哲学的な疑問や真理を伝えるものとする、彼が呼ぶところの「比類なきメタファー」(absolute Metapher) を深く探究した。⁽¹⁸⁾ 西欧における世界および人間の役割、さらには人間の宇宙における役割について述べる重要なメタファーを研究課題に掲げ、例えば「紛れもない真実」(“tactische Wahrheit”——ドイツ語では「裸の真理」と呼ばれる)、人間の知性や認知に関連した光および明るさという表現、人の一生を表す「航行」(Schiffahrt) という隠喩および「世界は書物みたいなものである」(Welt als Buch, “Lesbarkeit der Welt”) とつた「比類なきメタファー」を詳細に調査した。

このように、ブルーメンベルクは古代ギリシャ・ローマ時代以来続く西欧の世界観の展開と変化に興味を持ち、「概念」と「メタファー」の間に明らかな区別を施し、次のように説いた。

(比類なきメタファーは) 概念より最も極端な意味において「歴史」を有する。それはあるメタファーの歴史的な変質が、その中で起きる様々な概念の変容の限界および世界観の基本となるメタダイナミクスを明るみに出すからだ⁽¹⁹⁾

つまり、「概念」が、ある知識分野に限定されているのとは対照的に、「メタファー」はより広い意味を持ち、簡単にいえば「世界観」に近い意味を有する。言い換えれば、「メタファー」は色々な「概念」が変質していく枠組みであり、世界観であるので、メタファーの変容が歴史的な転換を際立たせる、というのである。その「概念」と「メタファー」を区別するよい例としてブルーメンベルクのコペルニクスの革命に対する論究を挙げよう。一五四三年当時主流であった地球中心説(天動説)を修正し、太陽中心説(地動説)を唱えた『天体の回転について』(ラテン語の原文では *De revolutionibus orbium coelestium*) が出版された時、一つではなく、二つの革命が起こったといつてよいとブルーメンベルクは説く。一つは、天文学の分野の「概念」の変革であり、しかしよりインパクトが高いもう一つの革命は、宇宙論的な「メタファー」の変革であった。それまで神の子とされていた人間が急に宇宙における中心的な位置から退き去せられ、万物の一つでしかなくなってしまった。神学者や哲学者をはじめ一般的なキリスト教信者に至るまで、この世界観におけるメタファー的な革命は、科学における概念的な革命よりもずっと受け入れ難いものであったに違いない。⁽²⁰⁾ この例からも窺えるように、ブルーメンベルクの隠喩論は、通常の術語や概念のように明確に定義できる意味や指示対象を持つキーワードよりも、文化的な権威を持つ「隠喩」の力により、根の深い「世界観」を分析する手段であるといえるのだ。

四 隠喩としての「文」

残念ながらブルーメンベルグは、ヨーロッパ以外の言語と文化圏をその研究対象とはしなかった。日本の研究をしていたとしたら、「文」を東アジアの魅力的な「比類なきメタファー」として検討していたかもしれない。周朝(紀元前一〇四一〜紀元前五六年)の文献の中に最初に現れた時から、「文」は、東アジアの文化および文学の先導的な「メタファー」であったことは疑問の余地がない。「文」は次の三つの意味において隠喩(メタファー)であると考えられる。まず、文字の位相において、元来の意味は、人や動物の身体の模様、交わった模様などであるが、これを基に「文」雅(質に対し)、公民(武事に対し)、「文」明(野蛮に対し)、「文」字(無文字に対し)、「文」献・テクストおよび学問、そして儒教の博識や学問を意味するようになった。周朝を武王とともに創立した「文」王の名前から窺えるが、東アジアの儒教的な政治文学における道徳的な王権の化身にもなった。簡単にいえば、「文」は文字通りの物質的な意味から抽象的な「文明」や「文化」等の意味に隠喩化されて使われるに至った。それは欧米の言語における「文学」という言葉とは違う。ちなみに、欧米の言語では、「文学」はほとんどすべての言語がラテン語の“*littera*”(アルファベットという文字)を語源とする。現代ギリシャ

語はラテン語ではなく古代ギリシャ語の“logos”（単語、言葉）を語源とし、「単語の芸術」（logotechnia）と表現する。インド・ヨーロッパ語族とは関係のない、韓国語や日本語にまでも及ぶウル・アルタイ語族に属するハンガリー語でさえも、「文学」を「書いたもの」（rodalom: írt = 書く）と表現する。

二つ目の意味においては、「文」は「比類なきメタファー」であるということが指摘できる。即ち「風」、「影響」、「風俗」、中国の詩経の一部分である「国風」、「諷諭」、「批判」、「諫言」等、同時に多数のものを意味する「風」という東アジアの基礎的概念と同様に、「文」は、あるコンテクストの中で多数の意味を持つており、唯一絶対のものを指示する語ではなく、様々な指示や連想を集め得る、一言では言い表せないものを指す語である。ゆえに「文」は文字通りの意味と隠喩的な意味とが同時に存在するため、欧米言語の翻訳者にとって翻訳の難しい言葉であり、一対一対応の翻訳ではなく、いくつもの単語を使用してこの一単語を表現しなければならない。例えば『和漢朗詠集』の中の「文詞附遺文」の部分を見ればその「文」の隠喩としての多価性がうかがえる。『和漢朗詠集』は、十一世紀のはじめに藤原公任によって自分の娘への贈り物として編集された、中国と日本において人気を博した詩句および和歌を朗詠するための、天気、草、動物等の類書の部立てで配列された詩歌文集である。「文詞附遺文」は、短い九つの抄句（最後に一首の和歌）を並べるといふ配列を通して、様々な「文」をめぐる意味の不一致を際立たせている。「文詞附遺文」は、『和漢朗詠集』の部立ての中で、前の部立ての「管絃」と次の部立ての「酒」の間に挟まれ、「文」、特に漢詩をよみ、酒や音楽も楽しみ同僚たちと仲良く交流する趣旨の詩宴での役割を強調する。ところが、この部立ての下に並べ

られた句と和歌一首の列举が「文」をめぐる様々な意味を呼び起こす。「文」を創作する際に適当な言葉を選ぶことの難しさ（四七〇）、死後「文」により詩人に与えられる不朽の名声（四七二）、「文才」およびその用と不用（四七二、四七四）、「文」の雲母の殿堂と水晶の皿のような「文飾」（四七三）、「文人」がお互いに「文集」を編集し合うこと（四七五）、「文」の天まで及ぶ、病氣さえも治療する力（四七六）、孔子が執筆した『春秋』と同様、日本文化史上重要な菅原道真の太宰府追放の際書かれた漢詩文集『菅家後集』（四七七）、そして最後に偽りだらけの恋文（こい「ふみ」）に対する落胆（四七八）。和歌が「文」にラブレター（ふみ）の形で、恋愛の世界を付加したことは、漢詩文の句に全く存在しなかったテーマを最後に掲出したことになる。なぜこのような配列を行ったのか。藤原公任は「文詞附遺文」の部分に曖昧に締めくくっている。漢詩文の句に呼び起こされた謹厳な世界に対して、最後に和歌を配することによって漢詩の世界が不実であることを批判しているのか。それとも、逆に、漢詩文の謹厳な世界が和歌の不忠を批判しているのか。あるいは、より大きな視点から、和歌の挿入により「和」と「漢」の世界の不一致性を指摘しているのか。はたまた、「文」の語が「漢文風」な概念でありながら、和歌一首を最後に配して部立てを締めくくる必要があったため、あえて和歌の不在よりも不一致を承知で和歌を並べるに至ったのか。藤原公任は「文」の隠喩的多価性を使って『和漢朗詠集』の読者と聞き手に「文」が明らかに定義されている言葉と概念であるよりも、「比類なきメタファー」であるということを示しているのではないだろうか。

三つ目の意味において、「文」はある分野に狭く限定された術語や概念ではなく、むしろ東アジア

文化圏の現代以前の最も広い政治的、社会的、教育的、文獻的、かつ「文学」的現実を形づくった世界観といつてよい。一言で言えば、「文」は世界観であり、世の中の様々なレベルにおける構造と型、つまり『易経』にある「天文」と「地文」に対する「人文」の世界を指している。それは確かにブルーメンベルグの「比類なきメタファー」と一致する。この世界観としての「文」を具体的にどうやって日本「文」学史に反映させ再構築すればよいのかということについては、後に考察したいと思う。

五 近代東アジアの「概念史」の価値と未来

日本ではまだ十分に受容されていない戦後ドイツでの「概念史」という研究方法は、本国のドイツでは六十年あまりにわたって支配的であったが、今やほとんど年老いているところである。大規模な辞典プロジェクト以外で、「概念史」という研究方法の最も長期的かつ学問的な場としては、一九五五年から五十冊以上を刊行してきた『概念史アーカイブ』(Archiv für Begriffsgeschichte)という雑誌がある。刊行を継続してきた六十年の間あまり変わることなく、ギリシャ・ローマ時代から現代までのヨーロッパ哲学と思想史(稀に科学史も含む)を中心としており、草創期の枠組みを超えて草分け的な研究を促進することはあまりない。同時に、グンブレヒトは概念史の末期を告げる。しかし、実は、ヨーロッパと西洋の文化圏を超えて、アラブ・インド・東アジア等の多種多様の豊かな世界の文化圏

にまで及ぶ真新しい概念史研究の可能性を完全に見落としている。これは「概念史」の研究方法的、より有望な未来である、と筆者は思う。特に近世以降一つの文化圏を超越して世界的な交流が著しく盛んになってきた今だからこそ、ある概念とメタファーがそれぞれの文化および言語の間でどのようにやり取りされ、お互いに影響を与え、翻訳されたかということを検討するために、概念史および隠喩論は大きな力を発揮するパラダイムになり得ると思う。例えば、東アジア儒教文化圏の「仁」という概念は最初どのようにキリスト教文化圏のラテン語およびドイツ語、またはイスラム教文化圏におけるアラブ哲学の倫理学に翻訳されたのだろうか。プラトンの「真理」(古代ギリシャ語で *alētheia*) の概念はどのように中国語や中国の古典思想世界に翻訳されたのか。

東アジアを研究する学者たちの間でこの二十年の間にこのような問題が大きな関心を集めている。東アジアについての「概念史」という研究方法を用いた体系的な研究はまだ始まったばかりで、これまでは特に十九世紀から西欧言語の影響の下発展してきた現代東アジアの科学的な術語や概念が研究の中心であった。⁽²²⁾ 残念ながら欧米で活躍している東アジアの研究者と戦後ドイツの西欧文化圏における概念史パラダイムを研究する学者との間には、交流はまだあまりない。しかしこのような交流が将来促進できれば、素晴らしい成果をもたらすかもしれない。いや、このような交流は不可欠であると考えられる。例えばコゼレックが西欧文化圏の場合において指摘した我々の現在の言葉遣いと概念が形成された「鞍部時代」が主として内在的なダイナミズムと、比較的長い時期(二七五〇〜一八五〇)を示すのとは対照的に、東アジアにおいて明確に「鞍部時代」といえるのは主として十九世紀末から二

十世紀初頭にかけて起こった現象である。さらに語彙的にも、また世界を把握する概念の枠組みにおいても、知的システムと世界観における巨大な変化の大部分は特に欧米の刺激の下に発展してきた。従って、欧米と東アジアの「鞍部時代」の時間的かつ内在・外在的なダイナミックを比較して探究することは、将来にむけて大いに啓発的であると考えられる。

現代中国語、日本語、韓国語の語彙の多くは、東アジアの「鞍部時代」の十九世紀末以降欧米言語の訳語として形成された。「パン」(ポルトガル語の“pão”から)、「アルバイト」(ドイツ語の“Arbeit”から)、「サービス」(英語の“service”から)のような発音が基となっている外来語は元を辿りやすいが、漢字文化圏における学問用語として漢文を基にして作られた語彙(現代の欧米における古代ギリシャ語やラテン語に由来する語彙と同様に)は他国語の訳語であつても、「日本化」されたため、外来語としての意味と顔を失った。このため「国家」、「民族」、「民主主義」、「哲学」、そして「文学」や「科学」のような「和製漢語」といわれる翻訳による概念が我々の現代の生活を支配している。しかし、現代を生きている私達が自然に受けとめているこれらの言葉は、使われ出してから実は一〇〇年余りの時間しか経ていない、古くから存在する和語を装った「偽りの友」にはかならない。「和製漢語」という現象は漢字文化圏において使われている表意文字である漢字のおかげによるものである。つまり、アルファベットの言語の文字は表音文字であるため、外来の語が外来の発音ももたらしけるので、すぐに「外来語」として認識できる。しかし表意文字の場合、時代によってまたは各国で発音が違つても、文字が同様であるので、外来語としての顔を失うということが起こる。このように見てくると、ヨーロッパ

文化圏と東アジア文化圏の言語系統、世界観、そして歴史的な発展のダイナミズムにおける概念史の本格的な比較は、将来最も期待できる研究領域であると言えるであろう。

六 日本における「文学」の概念史

日本でも「〇〇概念」と称するある概念の歴史的な変貌を追求することが最近盛んになってきた。一九七〇年代および八〇年代には、欧米の哲学、思想史や政治学の基礎的な概念の日本語訳の歴史的な検討が特に発展した。例えば齊藤毅は一九七七年の『明治のことば——文明開化と日本語』において「個人」(individual)と「社会」(society)の概念の訳語の発展を考察している。それと同時期に鈴木修次は『日本漢語と中国——漢字文化圏の近代化』(一九八一年)において「自由」(freedom, liberty)、「宗教」(religion)、「科学」(science)、「権利」(rights)等の概念の訳語の成立について詳細に調査している。さらに、この二十年の間に、鈴木貞美は、訳語としての「文学」という概念が近世から近代にかけて成立した過程について、三冊の著書を発表した。²³⁾ 齊藤と鈴木修次の論考における研究方法は、東アジアの伝統的な「訓詁学」と言われる、ある言葉について古代から近代までのできるだけ多くのテキストの中の典故(話)故、つまり典拠を調べ出し、その言葉の意味の成立を解釈する方法から一定のインスピレーションを受けている。ある概念を表す言葉がテキストの中に出現することを対象として分析を行う方法である。それと違って鈴木貞美はそこからこの概念が社会の中で果たしている実用

的な働きと役割に注目し、「思想的な機能の概念史」といえるアプローチを取る。さらに、明治時代に起こった変化について、「文学」という概念の成立を「知的システム」全体および教育制度の変質というコンテクストの中で、解釈している。⁽²⁴⁾ 鈴木貞美は明治時代に成立した「文学」に対し、今日の日本文学史の枠組みにしばしば表れる誤解を修正すべきだと説き、著書『日本の「文学」概念』における結論として、「文学史」を書き直すために次のようなプログラムを提案する。それはすなわち、日本を中心とする国文学の枠組みよりも国際的な視野を強調し、また同時に西欧の文学史のモデルのもとにある近代主義から解放すること、文学の流派から「文芸の全体像の回復」へ進むことで文化史および思想史の枠組みにおいて文学の役割を明らかにすること、さらには訳語である「文学」という欠点の多い概念を「芸術」というおそらく最も普遍的な概念に取って代わらせること、つまり「文学史」として書き換えることである。⁽²⁵⁾ 日本人が西欧の「文学」という概念を取り込むことで生じた苦境を、「文学」を普遍的な現象として捉えることで解決しようと、「文学」を次のように定義している。

文芸に対する考察は、他者を感動させること、すなわち他者によつて美的に享受されることを目的として提供される用言形態を中心にしてなされる⁽²⁶⁾

ここに示された、「文学」をその「文学性」、つまり審美的影響を引き起こさせる能力と機能によつ

て定義することは、ローマン・ヤコブソンが先鋒となった一九二〇年代のロシア・フォルマリズムの主たる主張であった。この文芸批評の流れがどれほど隆盛を極めたかは、アメリカにおける比較文学の分野についての最近の実態報告を見れば明らかである。つまり世界中の様々な文化や時代の異なる文学に卡ろうじて見出せる共通点として、文学の特徴として、その「文学性」(literariness)を挙げている。⁽²⁷⁾ 鈴木貞美はヤコブソンやロシア・フォルマリズム運動、あるいは欧米における「文学性」にまつわる豊かな議論についてはつきりとは言及はしていないが、明治時代に形成された文学という概念が西欧の影響によるものであるという苦境を打破しようとしているその利那にも、欧米の文学理論を密かに拝借している感は否めない。

本書は、今日も三上・高津の『日本文学史』にはじまる「偽りの友」の枠組みに連なる文学史の傾向を、鈴木貞美と同じく、批判することに同意する一方で、結局はまやかしである可能性が高い曖昧な「普遍性」よりも、「歴史」の方向に向かいたい。言い換えれば、訳語である「文学」の概念を脱構築するよりも、現代以前の日本文化史を形作った「文」のメタファーを追跡し、再構築することを目指しているといってもよい。「文」という今となつては外来語のような響きをもつ概念の、二十世紀に至るまでの一五〇〇年にわたる環境および文化史上の役割をどのように知り得るか、そして再び命を吹き込むことができるのか——それが本書の目指すものである。

七 日本「文」学史の再構築

以上、言語論的転回を基とする東西の「概念史」研究方法の大まかな動きと日本における「文学」の「概念史」を見渡してきたわけだが、これでようやく我々の主たる問題に戻ることができる。すなわち、「メタファー（隠喩）」・「世界観」としての「文」が、具体的にどのようなようにすれば、明治時代以降の「日本文学史」の近代主義的な枠組みを超越できるか、日本「文」学史を再構築できるかという問題である。この問題に具体的に取り組んでいくにあたって、次にいくつかのテーゼを提案したいと思う。

(1) 「文」は明示的な概念であるというよりも多種多層のメタファーであるため、「文」という単語を、詞・字の由来を明らかにする訓詁学のみによって古代および中世日本の現存文献全体から分析するという方法は不十分かもしれない。むしろ隠喩としての「文」を人間社会の中で絶えず出現する役割、動き、そして世界観として発掘すべきである。例えば平安時代の儒者は漢詩を作る際に「文」という言葉は使わずに、しかしその詩作は勿論「文」の「人間社会における機能」と世界に属していた。訓詁学的方法はその点を無視している。

(2) 人間社会における機能および世界観としての「文」を発掘するとともに、「文」の世界を、今

次の特徴をもつものとして、分類してみることを提案する。

i 「文」は物質的なモノであり、「文」学史はそのメディア、存在、保存に目を向ける必要がある。
ii 「文」は知的なシステムの構成、機能、意義、および教育制度の機関、カリキュラム、カノン、常学史はそのシステムの構造、機能、意義、および教育制度の機関、カリキュラム、カノン、常識としての資料、知識の伝授を含む。

iii 「文」は社会秩序を形づくる力を持つ。天皇から貴族、官人、儒者、僧や武家に至るまで各社会階層は「文」と特殊な関わりを有する。「文」の世界は主に男性主体の世界でありながら、とりわけ貴族の女性とも特色のある結びつきを示している。

iv 「文」は政治と外交の手段であり、魏の文帝曹丕の有名な「文章経国大業、不朽之盛事」という断言は、東アジアにおいて文論を国々の朝廷の政治論やイデオロギーと密接に繋げた。同時に、中国、日本、新羅、渤海等の漢字文化圏の各国の間を往来した使節が筆談および詩という「文」を通して交流したことは、東アジア文化圏のユニークな超文化的交流方法であった。

v 「文」は空間的な範疇でもあることを忘れてはいけない。「文」が作られた「場」、その「場」に居合わせる人々、風景、建築、ものや自然は、「文」のジャンル、形、内容に影響を与える。

vi 狭義の「文」は優雅であり、風流であり、特に漢詩の文体を指す。近代以前の漢詩は文体としての地位が高かっただけでなく、現代の意味における「文学の文体」と見なすよりも、上流階級の人々の日常使用する用語であったと考えるのが適当である。自分の教養を示す、相手

に尊敬を表す、自分の意見を間接的に披露する、朝廷の人々を楽しませる手段であった。

vii 日本における「文」は、モノリテラート (monoliterate) の中国と違って、バイリテラートの文学伝統を産んだ。明治時代に定着した、「消漢誇和」という、漢文の重要さを無視し、和文の大切さを過大に評価する、現代主義的な現在の教育制度に組み込まれている文学のカノンが、日本の文学伝統におけるバイリテラシーの世界文化史の立場からのユニークさを隠している。

(3) 以上の「文」の世界の特徴をみれば、日本「文」学史をひらくために次のアプローチが必要となることがわかる。

i 「文」学史を、「文」の世界および「文」学を隠喩論的な方法で、つまり「世界観」として発掘し、構築していくことを試みる。

ii 「文」学史は、生成的な (generative) アプローチを重視する。つまり古代および中世文学の作者がどのような教育や作文のトレーニングを受け、どのような文体および目的で、またどのような「場」でテキストを作ったかという問題意識のもと、「文」学史を記述する。言い換えればテキストという産物の基になる教育制度、幼学書、参考書や類書のようなマニュアル本の重要性と、テキストが出来上がる過程におけるそれらの役割に注目する。

iii 「文」学史は、「文学史」が通史的な記述を目指し主に時間的な軸を強調するのに対し、それよりも、「文」の世界の空間的な、「場」を中心とする側面を照らし出す。

iv 「文」学史は、「文学史」が通常「和」と「漢」のテキストと文体を同じ文学伝統ではないように扱い、別々の章に分けて取りあげるのとは違って、「和」と「漢」の間の言語上、文体上、教育上の比較とダイナミズムに特にスポットライトを当てる。

以上のテーゼはいま書かれるべき「文」学史の理論的な綱領を作り出すものである。ただの抽象的な宣言ではなく、本書の目次をみれば、本書がこれらのテーゼのもとに出来上がった実現の書であることが明らかにになる。

結び——二十一世紀において東アジアの「文」を再体現する

「文」学史をひらくことは、面倒くさいものに見えるだろう。我々が当たり前と見なしてきた「文学史」とあまりにちがうので、赤ん坊に返つてもう一度歩くことを学ぶような気がするかもしれない。伝統的な「文」の世界は、東アジアの「鞍部時代」にあたる二十世紀初頭には消滅したので、それは歴史専門の学者が扱う分野でしかないと思う読者もあるだろう。しかし「文」学史を理解し知ること、限られた専門家だけの義務ではない。日本人および東アジアそして全世界の人々に共有されるべき課題ではないかと筆者は思う。日本における古代と中世の「文」の世界を取り戻そうとすることは、懐旧的行為ではない。二十世紀の苦痛に満ちた戦争および植民地時代の傷、そして近年激化し

つつある経済的かつ軍事的な競争は、残念ながら二十一世紀の東アジアにおいても否定的に定義され引き継がれている。新聞の記事や過去の記憶は、このネガティブなイメージによって圧倒的に支配されている。このような状況下においてこそ、東アジア文化圏が共有する道徳的な政治、文明、学問および文学を尊重する「文」に基づいた「文」学史は、建設的な東アジアのイメージを作り出す治療的方法になり得るのではなからうか。この一〇〇年の間に互いを対立させるナショナリズムが東アジアの国々に台頭したが、善良な学者の間では周知されている「漢字文化圏」という共通文化遺産が、なぜ公的に認識され、普く認知されるには至らないのだろうか。またなぜ学校のカリキュラムにまで及ばないのであろうか。どのようにすれば東アジア共同の「文」化遺産を、意識させ、復活させ、共同的なアイデンティティを作り出すことができるだろうか。日本「文」学史をひらくことで、建設的なナショナリズムを超えたアイデンティティを作り上げていく過程に貢献したい。日本人および韓国人が中国文化の書物を背景とする漢字文化圏に属することを進んで受け入れ、将来誇りを持つて自身を「東アジア人」と呼べる日がくることは望めないだろうか。それは勿論長い時を要する過程だが、今日、フランス人とドイツ人が近世と近代における凄惨な戦争による傷を克服し、広い意味で自分たちを「ヨーロッパ人」と呼べるようになったのを先例とできるのであれば、望ましいことだと思う。

東アジア以外の地域に向けては、「文」の概念の特質を世界の学者と人々に注目してもらうことができたならば、東アジアに限定されている二十世紀以前の歴史的な意味を超えて、現代文化において薄れてきた文学の役割を再び強めるツールとなり得るだろう。文学は教育と研究の現場において、今

や映画、アニメなどのデジタル時代のメディアにどんどん取って代わられ、近づくにくいものになってしまった。このような現在の状況にあつて、東アジアの魅力的な「文」の世界を再生させることは、文学、さらに言えば「人文学」の位置を高める力を持つのではないかと思う。欧米の文化史において文学は、哲学とは違って、プラトンの諸論に従えば真理の最高価値とはかけ離れた、真理の偽物、悪質なフィクションとして定義されてきた。ゆえに文学はいつでも疑惑を引き起こしてきた。またこれまで見てきたように、欧米言語の「literature」の語源は「文字」にしか遡ることができないため、日本の「文学」に見られるような、「文」明や「文」化との密接で概念的な関係や価値は、全く見当たらない。逆に、例えば英語の「civilization」や「culture」は古代ローマの市民(civis)や農業(agri-cultura等)に語源をもっているが、日本語のように「文」明と「文」化が「文」の概念により「文学」と密接な関係を有するというようなこともない。経済を社会のベース(基盤)と見なし、文学、特に古典文学を不必要なエリート文化の上層部分(Überbau)として無視してきた、偏見に満ちた俗流マルクス主義(vulgar Marxism)の影響は、思いがけなく社会主義国だけでなく、全世界の学者の間に長く引き継がれてしまったが、これに対し、東アジアの「文」化、「文」明、そして「文」学の間基礎的な関係を強調する「文」の世界は、二十一世紀に文明という広い視野から文学に再び重要な役割を担わせるツールになり得る。また、どの大学においても今日見られる人文系の学生の人数および教師のポストの先例のない減少をはじめとする、我々が身をもって体験している「人文科学」の弱体化という危機の中で、今まさに文学を、二十一世紀のグローバル化の過程において文明の基礎的な部分に

復活させる、この「文」の世界と「文」学史の再構築に望みを託すべきではないかと思われる。ここにこそ東アジアの「文」のメタファーの歴史において、現代以前から現代以降へ向けての将来の一章となる可能性がある。

注

- (1) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社、一九九八年）一四七—一五二頁および三五—三六頁。
- (2) *Histoire générale de la civilisation en Europe depuis la chute de l'empire romain jusqu'à la Révolution française* (Bruxelles: Lacrosse, Librairie-Éditeur, 1838, pp.273-74.
- (3) 田口卯吉『日本開化小史』（講談社、一九八一年）四一頁。
- (4) Henry Thomas Buckle *History of Civilization in England* I. London: Longman, Roberts & Green, 第四版、1864, p.245.
- (5) 田口前掲注3書、一二四頁および仮名序の冒頭を参照。「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世中に在る人、事、業、繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの、聞くものに付けて、言ひ出せるなり。」小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系第五巻、岩波書店、一九八九年）四頁。
- (6) 現代における日本古典文学のカノンの創立についてハルオシラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、一九九九年）を参照。
- (7) 『日本文学史』I（金港堂、一九九〇年）一三頁。
- (8) 「バイリテラシー」の概念について Wiebe Denecke: *Classical World Literatures. Sino-Japanese and Greco-Roman Comparisons*. New York: Oxford University Press, 2013. バイブケ デーネーケ「世界

- 文学」の新しいパラダイムの展開と展望」（『文学』一三、四、七／八月号。二〇一二年）を参照。
- (9) “Die Bedeutung eines Wortes ist sein Gebrauch in der Sprache.” Ludwig Wittgenstein. *Philosophische Untersuchungen*, §43.
- (10) 前掲注9書 §7, §23.
- (11) クリフォード・ギアツ「厚い記述——文化の解釈学的理論をめざして」『文化の解釈学』（吉田禎吾他訳、岩波書店、一九八七年所収）。
- (12) 皮肉なのは、ドイツ語の概念史（“Begriffsgeschichte”）という言葉の意味が激しく変化したことがよい例となっている点である。ドイツ語の概念史（“Begriffsgeschichte”）という言葉は、最初にドイツの哲学者ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（一七七〇—一八三一）の著書『歴史哲学講義』の序文に出現した。ヘーゲルが提案した「反省的歴史記述」（reflektierende Geschichtsschreibung）すなわち作者は目撃者としてではなく、長期間の流れを通史的に語る、という歴史学の一種であるが、その中の“Begriffsgeschichte”は、ある「概念」、例えば音楽、法律、宗教等を選んで、その概念の通史を述べるという歴史学であり、今日我々が使う「概念史」、つまりある概念の意味と意義の由来および変容を研究するのとは全く違う意味を持つ。ヘーゲルが提案した「概念史」の意味はほぼ忘れ去られてしまった。
- (13) ドイツの概念史のパラダイムについて、同じ時期の英米仏において盛んだった思想史（history of ideas）、心性史（histoire des mentalités）、談話分析（discourse analysis）等との関連については、Hans Erich Bödker: “Ausprägungen der historischen Semantik in den historischen Kulturwissenschaften.” In Bödker et al. (eds.) *Begriffsgeschichte, Diskursgeschichte, Metapherngeschichte* (Göttingen: Wallstein, 2002), pp.9-27. 及び Hans Ulrich Gumbrecht. *Dimensionen und Grenzen der Begriffsgeschichte* (München: Wilhelm Fink Verlag, 2006), pp.27-37. を参照。
- (14) Hans Ulrich Gumbrecht. *Dimensionen und Grenzen der Begriffsgeschichte*. München: Wilhelm Fink Verlag,

2006, p.7.

- (15) Gumbrecht 前掲注14書 二七頁。

- (16) ガダマー『真理と方法——哲学的解釈学の要綱』（饗田収訳、法政大学出版局、一九八六年）、三二—三三頁。“Die philosophische Bemühung unserer Zeit unterscheidet sich dadurch von der klassischen Tradition der Philosophie, daß sie keine unmittelbare und ungebrochene Fortsetzung derselben darstellt. ... Das prägt sich vor allem in ihrem veränderten Verhältnis zum Begriff aus. So folgenswer und bis auf den Grund gehend die Umformungen des abendländischen philosophischen Denkens auch gewesen sind, die mit der Latinisierung der griechischen Begriffe und der Einformung der lateinischen Begriffssprache in die neueren Sprachen vor sich gingen—die Entstehung des geschichtlichen Bewußtseins in den letzten Jahrhunderten bedeutet einen Einschnitt von noch viel tieferer Art. Die naive Unschuld ist verlorengegangen, mit der man die Begriffe der Tradition den eigenen Gedanken dienstbar machte. .. Es ist ein neues, kritisches Bewußtsein, das seither alles verantwortliche Philosophieren zu begleiten hat und das die Sprach- und Denkgewohnheiten, die sich dem einzelnen in seiner Kommunikation mit seiner Mitwelt bilden, vor das Forum der geschichtlichen Tradition stellt, der wir alle gemeinsam angehören. Die nachfolgenden Untersuchungen bemühen sich, dieser Fragestellung dadurch nachzukommen, daß sie begriffsgeschichtliche Fragestellungen mit der sachlichen Exposition ihres Themas auf engste verknüpfen.” Gadamer: *Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, pp. xxx-xxxii.
- (17) Gumbrecht 前掲注14書 三六頁。
- (18) Hans Blumenberg, *Paradigmen zu einer Metaphorologie* (Frankfurt: Suhrkamp, 1998), 10. (初版は Archiv für Begriffsgeschichte 6, 1960).
- (19) Blumenberg 前掲注18書 一三三頁。“[Absolute Metaphern] haben Geschichte in einem radikaleren Sinn als Begriffe, denn der historische Wandel einer Metapher bringt die Metakinetik geschichtlicher Sinnhorizonte und

Sichtweisen selbst zum Vorschein, innerhalb deren Begriffe ihre Modifikationen erfahren.”

- (20) 前掲注18書 一四二—一六五頁。
- (21) 一九九五年から二〇〇〇年の間に禅および儒教の道学についての論文四編が出されたが、偶発的な出来事である感はない。『概念史アーカイブ』を意識的にヨーロッパ以外の世界へ開く予定はないとみられる。
- (22) 例えばライシンの学者チームがリードした広範なデータベースプロジェクトを参照：“A Repository of Chinese Scientific, Philosophical and Political Terms Coined in the Nineteenth and Early Twentieth Century 近現代漢語學術用語研究。” http://most.unihd.de/search/searchM/CST_shortlasso. 同チームが以下の二冊を編集した：Michael Lackner, Ivo Amelung, Joachim Kurtz (eds.) *New Terms for New Ideas: Western Knowledge and Lexical Change in Late Imperial China* (Leiden and Boston: Brill, 2001) 及び Lackner, Natascha Vittinghoff (eds.) *Mapping Meanings. The Field of New Learning in Late Qing China* (Leiden and Boston: Brill, 2004). 全体的に、基礎的世界観に関わる概念よりも、ある科学的な分野の術語に集中し、例えば音楽、考古学、地理学、法律、科学等は見られても、残念ながら文学の概念と関連する研究は含まれていない。とりわけ論理学、国際法律学およびその分野の発展と関連概念の成立については、Joachim Kurtz, *The Discovery of Chinese Logic* (Leiden, Boston: Brill 2011) 及び Rune Svarverud, *International Law as World Order in Late Imperial China: Translation, Reception, and Discourse, 1847-1911* (Leiden, Boston: Brill, 2007) を参照。訳語の問題を世界観の衝突の立場から、むしろ翻訳学の理論的な立場から追究したのは、以下のリディア・リウ (Lydia Liu 劉禾) の二冊 *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900-1937* (Stanford, Stanford University Press, 1995) 及び *The Clash of Empires: the Invention of China in Modern World Making* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2004)。
- (23) 『日本の「文学」を考える』（角川書店、一九九四年）、『日本の「文学」概念』（作品社、一九九八年）、『日本文学』の成立』（作品社、二〇〇九年）。

- (24) 鈴木貞美・劉建輝共編『東アジア近代における概念と知の再編成』(国際日本文化研究センター、二〇一〇年)も参照。
- (25) 鈴木前掲注1書、三五〇—三六一頁。
- (26) 鈴木前掲注1書、三五四頁。
- (27) Haun Saussy (ed.), *Comparative Literature in an Age of Globalization* (Baltimore: Johns Hopkins University Press), 2006, p.17.

「日本「文」学史」を考える基点として、古代中国における「文」の概念についてみる。中国の社会「環境」において、「文」は儒教といかなる関係を結びながら展開したのか、その動態をとらえる。

◆第二章…古代中国における「文」の概念の展開

渡邊義浩

はじめに

古代中国において「文」という概念は、多くの意味を持つ。劉師培^{りゅうしはい}によれば、「文」は「文物」「華靡」「礼学法制」「威儀文辞」「典籍」「文字」「言辞」という七つの意味に分けられる。本章は、これらのうち、「言辞」、すなわち言語表現に注目して、その展開を考察する。「文章」「文学」と熟することの多い「文」である。それは、他の「文」の概念が、時代によりさほど多くの展開をみせないことに対して、言語表現の「文」は、今日という文学意識が、儒教の規制力とせめぎあうことを主因に、その概念を大きく展開していくためである。「文」は、中国二〇〇〇年の正統思想である儒教といかなる関係を取り結ぶことにより、自己の概念を展開したのであろうか。